

経営学部派遣学生 留学体験記-1

派遣先：ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学

派遣期間：2016/9～2017/6



1. なぜカフォスカリ大学に交換留学しようと思ったか？

経営学の英語の授業が豊富だった、またイタリアの料理をはじめイタリアが好きだったからです。英語圏での留学希望だと英国や米国の大学に目がいきますが、その他の地域でも英語で学べるところがあります。ここカフォスカリ大学もその一つです。

2. 留学までの準備として、語学の勉強として取り組んだこと

英語とイタリア語の両言語を独学しました。英語は TOEFL 対策がメインとなり、イタリア語は簡単な日常会話をできるようにと便利なフレーズ集や簡単な文法の教科書を読みこみました。TOEFL はスピーキングとライティングといったアウトプットの分野が苦手だったので特に時間をかけました。スピーキングは Skype を使って英語のネイティブと話せるウェブサービス、例えば Italki やレアジョブを利用して積極的に英語を話す時間を作りました。またライティングも自動で自分の作文を添削してくれる Write&Improve というサービスを使い作文の質を高めていきました。作文のほうのサービスは無料ですようできるので特にお勧めです

3. 交換留学で一番嬉しかったこと：

多くの出会いに恵まれたことです。帰国後も連絡を取り続けている友人や、卒論研究に必要なインターンシップをさせてくれた経営者の方など、数えればきりがありません。余談ですがイタリア人はほめ上手です。私が現地でイタリア語の勉強を真剣に学び、今も続けているのはイタリア人にほめられてその気になったからです。こうした出会いや何気ない出来事がいまもよく覚えています。

4. 一番辛かったこと：

留学と就活を同時におこなったことです。幸い私の場合は帰国後にスムーズに内定をいただけたのですが、それでももっと事前に準備をしておくべきだったと反省しています。例えば私のように帰国直後に面接などをする場合は、テストや面接対策の本や会社四季報などを持っていったほうが良いでしょう。

経営学部派遣学生 留学体験記-2

派遣先：オーストラリア国立大学

派遣期間：2016年2月～2016年11月



1. なぜオーストラリア国立大学に交換留学しようと思ったか？

留学の目的が、英語力の向上とビジネスについてもっと深く学ぶことの2つでした。そのため、英語圏であるオーストラリアを選び、その中でも特に高いレベルの教育を国際色豊かな環境で受けられるオーストラリア国立大学を選択しました。

2. 留学までの準備として、語学の勉強として取り組んだこと

TOEFL iBTで80点を取るために、まずは大学1年次の夏休みに大学のTOEFL講座に参加しました。その後は自分でテキストを買ったり、英語のニュースを見たり、スカイプで英会話レッスンを受講したりなど試行錯誤を繰り返しながらなんとか必要要件をクリアしました。特に、リスニングが苦手だったので、テキストの他、YouTubeにあった練習問題などを活用しました。

3. 交換留学で一番嬉しかったこと：

様々な文化に触れ、多くの人と知り合えたことです。大学にはオーストラリア人のみならず各国からの留学生も多かったのも、そういった友人たちとともに大変さを共有しながら一緒に勉強したことや、様々な場所に旅行に行くことができたのはとても良い思い出です。留学を通し、異文化に戸惑いながらも理解を深め、視野を広げることができたと思います。

4. 一番辛かったこと：

日本の大学と異なり、ディスカッションやプレゼンの機会が多く、そういった授業のスタイルに慣れるのに時間がかかりました。留学生だからといって手加減されず、しっかり自分の意見を言うことができないと、教授や周りの学生からまったく相手にされません。時間が経つごとに慣れていきましたが、最初は本当に苦労しました。

また、課題も非常に多く、しっかり勉強時間をとらないと、授業についていくのが大変でした。

経営学部派遣学生 留学体験記-3

派遣先： University of East Anglia

派遣期間： 2016/07- 2017/08



1. なぜイーストアングリア大学に交換留学しようと思ったか？

以下の研究に取り組むうえで、渡航先の大学が協定校の中で最も評価が高かったため。(世界ランキング 15 位)

- ・国際開発学における開発と政治/教育との関係性の研究
- ・開発学領域での information technology や artificial intelligence の活動度の調査とそれらの活用方法の研究

・国際開発学における開発と政治/教育との関係性の研究：途上国での開発と現地の政治と教育は密接に関係していると考えられる。私は横浜国立大学では会計学を専攻しており、また本学にはそれらについて学べる授業が多くないか焦点をあてた授業が存在しないため、留学先の大学にて関係する授業を履修したいと考えた。

・開発学領域での information technology や artificial intelligence の活動度の調査とそれらの活用方法の研究：今後、開発学を発展させるためには、今までの研究や活動に加え IT や AI の利用が不可欠になると考えている。残念ながら留学先の大学にも私が知りうる限りでは開発学と IT や AI を組み合わせて取り組んでいる授業が開校されていないが、留学先の大学には多くの開発学研究者と学生が存在するため、横間国立大学で活動していたように現地の学生たちともグループを作るとともに勉強したいと考えた。

2. 留学までの準備として、語学の勉強として取り組んだこと

留学するために求められる語学試験の点数を獲得するための勉強や、渡航先での留学計画を推敲するうえで互いに切磋琢磨できる団体として、「本気になりたい人が本気になれる場」をコンセプトとする団体 EnII (えんつー：Enable×English) を立ち上げた。授業期間中の空き時間や放課後はもちろん、夏季休業中は朝 8 時から夜 10 時までメンバーが集まり、学習を行った。Reading や Listening は問題ごとに本文の中身や問題をいかに効率的に解くかについて話し合い、Speaking や Writing が互いに添削しあって学習を行った。そのため、効果的かつ効率的に学習を進めることができた。

3. 交換留学で一番嬉しかったこと： 語学力や学習分野の専門的知識について学べたことはもちろんのこと、それ以上に人間や言語を使ったコミュニケーションについて考え、実際に体感できたことが留学を通して最もうれしかったことだ。例えば、普段の生活では母国語である日本語を手足の様に扱って、他者と意思疎通を図ることができていたように感じていたが、留学を通じて言葉の意味が通じていることと意図が通じていることの違いを身をもって感じた。言葉の意味が通じるということは話者の発している単語や文法の意味を理解し、その発話内容が何を指しているのかを表面的に理解する状態を指している。一方で、意図が通じるということとは、単に情報の受け手が言語を理解できる（した気になる）のではなく、情報の発信者がその内容を発した理由やその背景にある考えを受け入れることができる状態を指している。留学中の使用言語は英語であったが、コミュニケーションを取るにあたって障害となったのはその言語の理解可能性の壁(意味)よりも、むしろ英語を介して意思疎通を図ろうとする両者の価値観の違いによる発信意図の違いによることであった。特にフラットメイトとは(1フラットを8人で共有していた。アジア出身は私だけで、イギリスや他のヨーロッパ諸国の出身者が多かった)、共同生活を送る中で同じ文法や単語を扱って会話をしても、その伝え方や表現の仕方に違和感を覚えることが多かった。これは決して円満に生活できたとかそうでなかったという話ではなく(実際には本当によい友人たちに恵まれたため、共同生活はとても良い記憶として残っている)、例えば形式的に言えば、人と意思を疎通する際に私の価値観として自分の意見を伝える前にまずは相手が何を考えているのかを理解することに努めるのに対し、一方で相手はまずは自分の考えを主張することに重きを置いていたため、私の話を遮ってでも意思を伝えようとするなどのコミュニケーション手法の違いを主にさせている。もちろんこれは和を重んじる文化で育った私と、個々人の権利は自分で守るのが当たり前である文化(ゆえに自己主張を大切にす価値観)で育った人との国の違いともみることができるが、細部にまで目を凝らしてみれば、これは日本での生活でも同じ構造をしていることが見て取れる。一見すると同じ日本人として言葉のキャッチボールはできているように見えても、人それぞれに言葉の使い分けの違い(それぞれの言葉にどれほどの重みや思いを付けて話しているのか)は千差万別である。渡航をする前から、人の価値観は育った環境によって大きく異なることは感じていたが、留学経験を通して、自由に扱えないことでより着目するようになった言語について、その価値観の違いは大きくそれぞれの言葉に表れるということを感じるとともに、その意味で言葉を介して意思を疎通することの難易度の高さ、特に異なる環境で生まれ育った人同士が言葉の違い(言語の違いではなく、1つ1つの言葉に込められた意図の違い)を超えて理解し合うことの難しさを感じた。同時に、その違いを受け入れるという捉え方についても育まれたように思う。福田恆存の絶望からの出発という言葉には非常に感銘を受けていたが、互いに異なることが前提の海外での生活を通してそれが単なる理解から体の中に落とし込まれたように感じる。

4. 一番辛かったこと： 留学に必要なスコアを満たして渡航したとはいえ、ネイティブとの会話が完璧に理解でき、また自身の思考を100%スムーズに表現できるレベルではなかったため、ディスカッションの時間で毎回悔しい思いをしたことだ。同じテーマについて日本語で議論すればより正確に自分の考えを伝え、相手の意見をくみ取り議論を進められるのに、英語でそれができないことの自分の英語力の足りなさは留学を終えても、不満が残らないことはなかった。

経営学部派遣学生 留学体験記-4

派遣先： オストラバ工科大学（チェコ共和国）

派遣期間： 2016年9月～2017年7月



1. なぜオストラバ工科大学に交換留学しようと思ったか？

①東欧文化を知りたかったから。

馴染みのない土地で新しい体験をしたいと考えたからです。

②日本人が全くいない環境だったから。

日本語を全く使わず生活していくことで、大きく成長できると考えたからです。

2. 留学までの準備として、語学の勉強として取り組んだこと

①大学の海外研修プログラム

私は交換留学の前に2度海外研修に参加しました。3年生の春休みに香港の香港理工大学に1か月間と、夏休みに韓国の釜慶国立大学に1週間通い、英語でクラスを受講しておりました。これらの経験により、交換留学中での授業風景をイメージすることができました。

②交換留学生のチューター

私は大学に来るアメリカと中国の交換留学生をサポートするチューターを合計1年以上担当しておりました。これによって英語を実践的に使うことができるようになり、日常生活の中で英語を学ぶ機会を増やすことができました。

3. 交換留学で一番嬉しかったこと：視野を広げて成長できたこと。

様々なことに積極的に挑戦した1年間でした。たとえば大学のサッカーリーグへ所属したり、日本語教師を担当したり、地元企業の営業の手伝いをしたりといった経験です。これらの経験を通して、自分が見る世界が大きく広がり、様々な人々と出会い、困難を乗り越えていくことで、人間として大きく成長できました。

4. 一番辛かったこと：文化の違い。

言語や人種、生活習慣、文化などあらゆる場面で文化差異を感じていました。特に渡航した直後はこれがストレスとなっていたことがありましたが、ある程度時間が経つと慣れていき、文化差異による辛い経験も新たな学びとしてポジティブに受け止めることができました。